身代わりから始める恋

ひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
身代わりから始める恋

【Ｎコード】
Ｎ５７２６Ｍ

【作者名】
ひろ

【あらすじ】
１年前の出来事が災いし、全てと距離をとっていた朝霧（あさぎ）。
失恋から何時までも立ち直れないでいた朝霧の前に、ビスクドールの様な少年が現れ、“身代わり”になると告げられた――――。

出会い（前書き）

この作品は　ＢＬ　所謂、ボーイズラブです。

興味がない方、ご理解いただけない方はご遠慮願います・・・。

出会い

緩めたネクタイを風に靡かせながら、屋上に佇む。
見上げた空が、何故だかぼやけて見えて苦笑をこぼした。
まさか自分が、ここまであの人の事を好きになるとは思わずにいたから驚いてしまう。
あの人が誰を想っているかなんて解りきっていたはずだったのに・・・。
身代りになんか、ならなければ良かったのか・・・。
沈む夕日に、全てを諦めろと言われているような気がして、滲んだ涙を拭えずにいた――。

自分が吹き出した紫煙が、赤紫に染まる空に消えて行く。
1年前に憶えた煙草の味が、妙に舌を刺激し眉間に皺を寄せる。
あいつの事が死ぬ程好きだったはずなのに、今自分の胸を占めるのはあの子だ。
何時の間にか横に居るのが当たり前になっていたから、想いを伝える事を躊躇った。
そんな臆病な自分に嫌気がさして、そして1年前の、同じ過ちを繰り返すのか？と自問自答していた――。

少し長めの真っ赤な髪が、他生徒に脅威を感じさせる。
入学そうそうなのに、制服は当たり前のように着崩し、ネクタイは

勿論緩められている。ワイシャツのボタンは3つ程外されており、ちらりと見える鎖骨が、妙に色気を発していた。
耳には当然の様にイヤホンが嵌められており、周りの騒音をシャットダウンさせている。
周囲の視線をものともしないで、かっぽしながら屋上を見上げるその姿は、今年の4月に入学式を終えたばかりの1年生とは思えない程、堂々としていた。
色素の薄い肌に、赤みがかった瞳は綺麗な二重。日本人離れした顔は、まるでビスクドールの様に美しい。成長期はこれからなのか、身長は１６０をようやく超えた程度だろう。
１学年上に、やっぱり人形のような綺麗な先輩がいるけれど、彼はその先輩にもひけをとらない容姿をしていた。
色々な意味で周囲から注目を浴びる彼は、しかしどうでも良い、と思っていた。
この学校に入学したのも、ただ実家から逃げ出したい一心だったからだ。
もともと自分は養子で、養父母には一応感謝しているけれど、必要なまでの干渉に嫌気を指していたのだ。
もともと勉学が得意だったのをいい事に、養父母のいる千葉から離れ、一部寮があるこの男子校を受験。見事に合格し、今現在この学校の寮で生活をしていた。
寮を使用している生徒はごく僅かな為、与えられる部屋は勿論個室。その生活に一応満足している彼は、成績優秀な事もあって、ある程度の校則違反は注意されずにすんでいた。
そんな彼の肩をたたく者がいた。
自分の世界を邪魔された事に苛立ちを感じながら振り向いた彼は、そこに綺麗なそうして清楚ななりをしている人間を目の当たりにした。ネクタイの色を確認し、1学年上の先輩である事を察知する。
急いでイヤホンを取り、彼に対峙した。
「これ、君の？」

綺麗な手の上にあったのは、見慣れた携帯電話。
「あ・・・」
急いで自分のズボンのポケットを確認し、それがまぎれもない自分の物だと解ると、おずおずとそれを受け取る。
「ありがとうございます・・・」
ぼそり、と告げられた言葉に笑顔を浮かべ、その先輩は息を吐いた。
「あぁ、良かった。違ったらどうしようかと思ったよ」
笑顔のままのその人の言葉に、彼は何も言えないでいた。
そんな2人に声がかかる。
「遙(はるか)!」
自分達より少し前からの声に、“遙”と呼ばれたその先輩は、今まで以上に綺麗な笑顔を浮かべ、声の主に応えた。
「それじゃ」
“遙”と呼ばれた先輩は短くそう言うと、声の主の側へ掛けるように行ってしまった。
「・・ごめん、隼(はやと)・・」
風に乗り、楽しそうな会話が聞こえた気がした。
そんな2人を眺めながら、はぁ〜、すげぇ〜綺麗な人だったな、等と思っていると、彼こと、壱尹(いちい)　瀬那(せな)は物凄い視線を感じた。ぞくりと思わず身震いしてしまう程の強い視線は、上の方から浴びせられていて瀬那は視線を上げる。
屋上に、人の影を見つけ目を細めた。しかし、明らかな距離があり、又日差しが邪魔をし顔まで確認できない。
なんだろう、と思いながらも瀬那は気にする事をやめ校舎の中に入っていった。

鋭い視線を送っていた当の本人、相良(さがら)　朝霧(あさぎ)は4時限目をサボタージュする為屋上に上り、藍色のネクタイを弛めながら空を仰いだ。
ゆっくりと柵まで歩いて行こうとした朝霧の耳に、聞き慣れない音

が聞こえる。遠くの方で、シャカシャカと小さな音が聞こえ、朝霧は頭を仰いだ。
屋上入口のコンクリートの上にネクタイが揺れているのが見える。よく目を凝らすと柔かそうな赤い髪が見えた。目を閉じたその顔は、色素が薄く、まるでビスクドールのように美しい。
一瞬だけれど、“あいつ”を思いだした。そうして胸が苦しさを訴える。脳裏に1年前の出来事が浮かび朝霧は目をギュッと閉じた。
「・・・目にゴミでも入ったのか？」
急に声が降って来て、朝霧は急いで目を開ける。コンクリの上で寝そべっていた少年が、いつの間にかその瞳を開け、二重の大きな瞳が朝霧を捉えていた。その瞳も赤みがかっていて、ますます人形のように見える。
「あぁ・・・いや、別に・・・」
歯切れの悪い朝霧の言葉に、少年はふん、と鼻で笑い身体を起こした。
「まぁ、別にいいけど」
そう言うと、上から飛び降り、朝霧を横目で見ながらその場を後にしたのだった。
1人屋上に取り残された朝霧は、制服のポケットから煙草を出し、紫煙を燻らせ溜息を吐いた――――――。

それが、瀬那と朝霧の出会いだった――――。

接近

周囲の度肝を抜く格好の瀬那(せな)だったけれど、なぜだか同学年の、ましてや同じクラスの人間からは妙に可愛がられていた。
可愛らしい顔のおかげなのか解らないが、正直瀬那には迷惑のなにものでもない。
成績は常にトップだったのもあり、はっきり言って授業にも出る気はあまりなかった。
入学そうそうではあるけれどサボタージュの常習犯だった瀬那は、今日も教室にはほぼいない。
勿論サボろうと思い、屋上へ向かうけれど、そこでふと足を止めた。
この学校には3棟校舎がある。南の棟がA棟、西に2棟繋がり建っていて外側にあるのがB棟、そうして最後にC棟となっていた。
A棟の屋上が瀬那はお気に入りだったが、其処に先日見知らぬ生徒・・・ネクタイが藍色だった為2年生である事は確かだ、が居た事を思い出す。
基本、1人が好きだった瀬那は、チッと舌を鳴らし、仕方なくC棟の屋上を目指した。
歩きながら、先日出くわした“先輩”を思い出す。
端正な顔立ち、切れ長の目、身長はゆうに１８０は超えているであろう。その切れ長の目をギュッと瞑り、彼は何を思っていたのか・・・瀬那はふと思った。
てくてくと歩き、C棟の屋上の扉を開ける。
A棟の屋上とは違い、周りの景色は残念ながら開かれていないが、おかげで目隠しの役割も担ってくれて瀬那には好都合である。
日陰を選んで腰を降ろし、瀬那は参考書を開いた。その参考書は既に3学期のもの。

パラパラと捲っていき、公式等を覚えていく。そんな瀬那の耳に、足音がした。
腕時計を確認し、首を捻る。センコーか？等と思い、瀬那は頭を上げた。
しかし、屋上の入り口付近に立っていたのは、先生ではなく1人の生徒だった。
――――――――――　お、珍しぃ～
等と口笛でも吹き出すのではないか、と思われる程陽気に思っていた瀬那の動きが、ぴたりと止まった。その生徒に見覚えがあったからだ。
その生徒は、先日A棟の屋上にいた“先輩”。
――――――――――　またかよ～・・・
とイライラした瀬那は参考書を閉じ、その先輩の動向を伺った。
“先輩”は険しい表情で柵まで歩いて行くと、その場でフリーズする。ジッと何かを見ているようだ。
まるでモデルの様な容姿を持った人が、このような険しい表情をし見詰めなければならない事柄があるのか？と不思議に思い、瀬那は興味を抱いた。
“先輩”に悟られないように、ゆっくりと“先輩”の後方まで進み、柵の下を眺める。
グラウンドが一望でき、そのグラウンドでは何処かのクラスが丁度体育をしていた。その中に一際輝く存在を認め、瀬那は目を凝らす。
その人が、先日自分の携帯を拾ってくれた“遙（はるか）”である事に気付いた瀬那は、その隣に“隼（はやと）”を認めた。
先日の様子で、多分付き合っているのだろうと思っていた瀬那は静かに微笑む。
その瞬間、“先輩”が小さな声を発した。
「遙・・・」
その苦しそうな呟きに、瀬那は息を飲む。そうして回転の速い頭は、ある答えに辿りついていた。

――――――――――　成程ね・・・
そんな事を心の中で呟き、瀬那は何故だか“先輩”に声を掛けていた。
「また逢いましたね」
絵に描いたように身体をビクリと震わせ、“先輩”が振り向く。瀬那は極上の笑顔を浮かべ“先輩”の視線を捉えた。
「・・・あ、この間の1年・・・」
動揺を隠すかのように呟いた“先輩”に瀬那は一歩近づく。
「瀬那」
瀬那の言葉に、“先輩”はクエスチョンマークを浮かべた。
「え？」
聞き返された言葉に被せるように瀬那はもう一度口を開く。
「壱尹　瀬那。“1年”じゃないですよ、先輩」
自己紹介をしている事に合点がいき、“先輩”は苦笑を浮かべた。
その顔に瀬那は息苦しさを覚える。
「あぁ・・・俺は相良」
「・・・相良先輩ね。下の名前は？」
笑顔をたたえたまま聞くと、一瞬間が開き、そうして名前を告げた。
「朝霧（あさぎ）」
「朝霧先輩ね・・・。俺、よくB棟の屋上に居るんで、暇なら遊びに来て下さいよ」
名前を確認し、何故だか瀬那はそんな事を口にしていた。朝霧は困惑気な顔をしながら、瀬那の顔を眺める。
「・・・ここで“遙”さんの事、見詰めてるよりマシだと思うけど？」
妖しい笑顔を浮かべ告げた言葉に、朝霧は目を見張った。
「な、に」
「それじゃ」
何かを言おうとした朝霧の言葉に被せながら一方的に告げ、瀬那はC棟の屋上を後にしたのだった。

屋上から出て行った瀬那を追いかける事など出来ず、朝霧は呆然とその場に佇んでいた。
瀬那の言葉が頭の中を反響する。
何故にあの子は自分と遙の事を知っているのか、解らない。“見詰めているよりマシ”とはどういう意味なのか・・・。
瀬那の言いようは、自分の気持ちまで知っているかの様に聞こえ、朝霧は寒い物を感じた。
そうして隣の棟の屋上を凝視する。赤い、柔かそうな髪が、遠くで揺れているのが見えた。
――――――――――　あぁ、本当にいる・・・
そう思った朝霧は、無意識の内に歩きだしていた・・・。

自分の言動に驚きながらも、瀬那はB棟の屋上への扉を開いていた。後悔もあったけれど、何故だか朝霧は必ず来ると確信めいたものがあり、瀬那はB棟の屋上に腰を降ろした。
ここからは屋上の入り口は見えない。けれど、音はしっかりと聞こえる為、？那は耳を澄ました。
グラウンドから微かに聞こえる授業の音とは別の音を聴き逃さない様に目を瞑り、全神経を聴覚へ注ぐ。数分後、こつこつという靴音が、研ぎ澄まされた？那の聴覚は捉えた。
その靴音に照準を合わせる。靴音は明らかに階段を上っていて、直後に屋上の扉が開かれた。
？那は赤い瞳を開く。靴音を確認しながら頭をそちらの方向に向けた。靴音はあっちに行ったりこっちに行ったりを繰り返し、漸く？那の近くに来る。影が差し、そうして朝霧の姿を捉えた。
「・・・どうも」
？那の言葉に、朝霧は困惑気味な顔をしながらも

「どうも・・・」
と言葉を発した。言葉を発した後も、一向に動こうとしない朝霧に?那は苦笑を浮かべる。
「座ったらどうですか?」
自分の横を指さしながら言った?那に、しかし朝霧はやっぱり動かない。その態度に妙な苛立ちを覚えた?那は、立っている朝霧の腕を掴むと強引に自分の横に座らせた。其処に座ってしまえば朝霧はもう立ち上がる事はしない。?那は満足そうに笑い、持っていた参考書を開いたのだった。

ビスクドールのような綺麗な少年?那に強引に座らされて、朝霧は面喰っていた。おまけに座らせる事だけが目的だったように、その後は言葉を発する事なく参考書等を開いている。
自分はする事がなく、意識が遙に行ってしまい何の為に此処に来たのか分からない。
パラパラと参考書が捲られる音に意識を集中させ、そうして?那の顔を盗み見た。
肌は透ける様に白く、視線は参考書に向いていてその伏し目がちにどきりとする。ほっそりとした首筋も当然のように白く、思わず『触れてみたい』と思ってしまう。自分の危ない思考に焦りを感じ、朝霧は急いで?那から視線を外した。
その瞬間、パタン、と本を閉じる音がする。朝霧はもう一度?那に視線を向けると、同じように朝霧に視線を馳せた?那の赤い瞳とかちあった。
驚いて急いで視線を外す朝霧に?那は笑った。
「俺の顔になんかついてます?」
笑いながらの質問に答えられない。
「せっかく此処に来たんですから、何か話して下さいよ」
?那の言葉に、どうすれば良かったのか・・・。困惑する朝霧に、

?那はまたしても爆弾発言をした。
「“遙”さんの変わりになってあげてもいいですよ?」
意味を理解する事ができなくて目を見張る。
?那は妖しい、けれど艶やかな笑顔を向けた。
そうして次の瞬間にはその綺麗な赤みがかった唇が、自分のそれに合わさっていた。
閉じられた?那の睫毛が、やけに長いな、などとどうでも良い事を思いながら、朝霧は瀬那の身体をその腕の中に収めた――。

身代わり

新しい遊び、そう割り切る事で、なんとか自分の意識を保っていた。
自分の発言、行動がおかしな事になっている事は十分に理解できるけれど、修正はできない。
?那(せな)は、まるで誘うかのような発言をしてしまった事を深く後悔・・・いや違う、後悔ではなく困惑していた。
キスをした後、驚いて固まっている朝霧(あさぎ)をその場に残し屋上を後にした事も、翌日からやっぱり屋上に来る、朝霧の行動も理解できない。
今も自分の横に朝霧は座っていて、その手には単行本が握られていた。
自分の行動に動揺を隠せない?那は、勿論勉強どころではなかった。
それでも、キスの感覚、抱擁された時の暖かさ、何よりも一緒にいる時間の幸せ感は忘れられない。
自分の中の不思議な感覚に戸惑いながらも、今を楽しんでいた。
「壱伊(いちい)」
急に呼ばれて、?那は意識を現実に戻す。
「はい?」
返事に朝霧は小さく笑った。
「今度の土曜、暇?」
遠慮がちな朝霧の言葉に、?那は戸惑いながらも特に用事が有る訳でもないのでそのまま答える。
「・・・そっか、じゃあ、ちょっと付き合ってくれるか?」
これはデートの誘いだろうか・・・。?那はやっぱり戸惑いながらも、申し出に了解を告げたのだった。

急な誘いに、しかし彼は了解してくれた。
実は遙(はるか)と隼(はやと)に誘われていたのだ。1年前の出来事から何となく疎遠になっていた朝霧と遙だったけれど、？那と屋上で逢う様になり、何故だか壁が消えた気がする。そんな朝霧の変化に遙は敏感に反応し、一昨日声を掛けて来たのだった。
なんでも、隼の所属しているバンドのライブがあるらしく、人数確保の為に誘われたのだ。
壁が無くなったとしても、やっぱりそんな所に1人で行ける訳もなくて、？那を誘った。
「あのぉ～、何処行くんスか？」
見知らぬ土地なのだろう、連れて歩いていると？那は聞いて来た。
「もう少し先」
短く答えた朝霧に、とりあえず黙ってついて来る。
ライブハウス、などと言う所には、勿論自分も行った事は無かったけれど、インターネットで場所は確認済みだし、入口に遙は待っていると言っていたから問題ないだろう。
休日の繁華街というのはなぜにこんなに人が沢山いるのかとウンザリしながら歩き、頭に叩き込んだ地図通りに角を曲がり、そこにライブハウスの看板を見つけた。
？那はやっぱり何も言わずに付いてくる。
少し後ろめたい気したけれど、とりあえずその気持ちに蓋をする。
看板を目指し歩いていた朝霧の目が、遙の姿を捉えた。
その瞬間、自分の口角が緩むのを感じる。そんな自分に苦笑を浮かべながら、朝霧は歩みを進めた。
「あ・・・」
後ろを黙って付いて来た？那が小さく呟く。
「これから、あのライブハウスでライブがあるらしい」
朝霧は、短く伝え遙のもとに進んだ。
「朝霧、来てくれたんだね」

綺麗な笑顔でそう言うと、遙は後ろの方に視線を向ける。それが瀬那へ向けられていると知り、朝霧も彼を仰いだ。
５０ｍ程向こうに瀬那は立っていた。朝霧が訝しそうに眉間に皺を寄せるのと、遙が声を発するのはほぼ同時だった。
「あれ？・・・あの子・・・」
その言葉に遙を仰ぎ見る。
知り合い？と視線を送れば、やっぱり綺麗な笑顔を浮かべた。再度仰ぎ見ると、やっぱり５０ｍのところに立ち尽くしている。その姿に苛立ちを覚えた朝霧は声を大きくし瀬那を呼んだ。瀬那はなんとも奇妙な顔を浮かべながらも、朝霧のもとに歩いてくる。
“壱伊”くんって言うんだ。どういう知り合い？」
遙の言葉に曖昧に頷く。“どういう”と云うほど自分は彼のことを知らないし、勿論彼もそうだろう。まさか、屋上での事を話せる訳も無くて言葉を濁した。
「・・・どうも、遙先輩」
何時の間にか、後ろに来ていた瀬那は、ちらりと朝霧を見た後挨拶をした。
「こんばんは。今日は急なお願いだったのにこんなところまで来てくれてありがとう」
笑顔で挨拶を交わす２人に戸惑いながら、朝霧は交互に２人の事を見る。
綺麗な２人に周りの視線が注がれる。そうして次に自分に向けられた視線に苛立ちを覚える朝霧だった。

がやがやと五月蝿いライブハウス内は妙な熱気に包まれている。
そして自分と朝霧が浮いているような気がして瀬那は落ち着かなかった。更に朝霧の横に遙がいて、それも何故だか自分の心を騒がせる。妙な感覚を覚えながら、瀬那はステージを見詰めた。
「次だよ！」

周りの声に負けないように遙が声を大きくし朝霧に伝えているのが聞こえる。朝霧は『おう』だか『うん』だかと答えていた。
ステージが暗転し、突然大きな音が響く。瀬那は思わず耳を塞いだ。ステージにライトが当たると、見知らぬボーカルの斜め右隣に知っている顔を見つけた。
それが隼だと解ると、何故遙がここに居るのか合点が行く。そうして朝霧が自分の事を誘った理由が解り、何故だか胸がきりきりと痛んだ。
咄嗟に胸を押さえた瀬那に低い声が聞こえる。
「どうした？具合でも悪いのか？」
耳元に息が掛かる程近くで聞こえた声が朝霧の物だと解ると、今度は違う衝撃が胸を揺るがす。自分の鼓動が大きく波打つ事に戸惑いながら、朝霧を仰ぎ見た。息苦しさに言葉を発せない瀬那は首を振る事で質問に答える。
納得していないのか、朝霧の凛々しい眉が動き、眉間に皺を作った。本当に？と口が動くのが見えて、瀬那は苦笑を浮かべる。少し大きな声で
「人に酔っただけ。ちょっと、休憩してくる」
嘘を云い、ライブハウスの外に出た。大きく息を吐き、側にある自販機でペットボトルのお茶を購入する。ペットボトルに口を付け空を仰いだ。
今日呼ばれたのは多分あの2人のせいだろう。
学校で見た、朝霧の視線で2人がどういう関係か理解できた瀬那は、更に朝霧の気持ちまでも見えていた。
あの苦しそうな視線は、つまりそう言う事なのだ。
だから自分はあの時咄嗟に“遙の変わりに”と告げたのだ。
朝霧の反応で自分の考えが間違いではなかった事を知る。少しでも、朝霧の苦しさを取ってあげたいと思った瀬那は、しかし実際に“身代わり”になった事で、その考えが間違いであった事を知った。
自分は、遙の代わりになどなれない。

そんな事は百も承知だったはずで、これは新しいゲームのようなものだと思いこもうとしていたけれど、自分の気持ちに薄々感づいていた瀬那は仰ぎ見ていた空が涙で滲んでしまった事に苦笑した。
そうして、きりきり痛む胸にも、妙にドキドキしてしまう心にも理由が見つかり小さく息を吐く。
俺って、男もいけたんだ、なんて茶化すように思いながら、流れる涙を拭った。
「“身代わり”か・・・」
瀬那の小さく呟いた言葉は、驚くほど綺麗な夜空に吸い込まれ、そうして誰にも気付かれないまま消えて行ったのだった――――。

変化

ライブ終了後、遙(はるか)に言われるがまま2人は楽屋に向った。
沢山のライブ参加者がごった返している楽屋は、妙に男臭い。朝霧(あさぎ)と瀬那(せな)は一瞬眉間に皺を寄せながら目当ての人間を探した。
他の人間の視線が、自然と遙と瀬那に向けられている事が解る。2人とも驚く程に美人である事を痛感させられる。遙は勿論そんな視線には気付かずに、目当ての人間を探している。
しかし、瀬那は違った。明らかに向けられる視線に気付き威嚇している。
そんな姿に、朝霧は自然と笑顔を浮かべていた。
と、1人の出演者であるのであろう男が近づいて来る。真直ぐに遙の側まで来た男はまじまじと遙を凝視した。
「あんた、男？随分と綺麗だな。暇なら、俺と遊ばない？」
明らかなナンパ。更に違う男が近づいて来て、今度は瀬那に声を掛けた。
「君、綺麗だね。これから食事でもどう？」
こちらもやはりナンパらしい。おいおい、と思う反面どっちを助けるべきか迷う。しかし直ぐにその悩みは解決された。瀬那の凄みの聞いた声が、騒がしい楽屋の中に低く響く。
「さわんじゃねぇ」
その妙な威圧感に相手の男が固まるのが解った。思わず苦笑が零れてしまう。なんだか相手が可愛そうに見えた。
瀬那の凄みに、遙にちょっかいを出していた男も固まる。其処に隼(はやと)が姿を現した。
「ごめん、これ俺の連れ」
静かに男から遙を遠ざけ、朝霧と瀬那に視線を送った。

「壱伊、行くぞ」
朝霧の言葉に、周りを威嚇していた瀬那はその刃をしまい素直に従う。そうして隼の後に続き歩き始めた。

隼のバンドはどうやら人気があるようで、喧騒の楽屋の続きになっている扉が開かれ、次の間に個別の楽屋が用意されていた。扉を閉めると、隣の部屋の喧騒が嘘のように静かになる。
遙を庇う様に歩いていた隼が振り返り、瀬那を見た。
「“壱伊”くん、で良かった？」
隼の言葉に瀬那が小さく頷くと、隼は相好を崩した。人の良さそうな笑顔に瀬那は少し困惑する。
「ありがとう、君のおかげで遙が無事だったよ」
感謝の意を示されて、瀬那は余計に困惑した。
「・・・いや、別に遙先輩の為って訳じゃ・・・」
まるで、言い訳のような言葉に、しかしやっぱり隼は感謝を崩さない。
「そうかもしれないけど、君の言葉で遙が助けられたのは事実だから」
そんな事を云われてもやっぱり納得できなかった。もともと素行の良くなかった自分だからあれはごく自然な言葉で、しかしそれだけではなくて、朝霧の遙への視線が優しいものだったからつい苛立ってしまったのだ。だから決して隼に感謝されるような事ではなかったはずだ。
反論しようとした瀬那だったが、もう既にこちらの話になど注意を払っていない隼に溜息を吐くだけだった。
周りを気にせずにいちゃつく2人に、瀬那は朝霧が心配になった。自分の斜め後ろにいる朝霧をこっそりと見る。予想に反して朝霧は涼しい顔をし、かつ瀬那を見ていた。視線がかち合い鼓動が又高鳴る。とたんに苦渋に満ちたような顔に変わり、朝霧は口を開いた。

「なんだよ」
機嫌が悪いような言い草に、瀬那は泣きそうになる。ぐっと涙を堪え、目に力を込めた瀬那は朝霧を睨み返した。
「別に」
短く言い放ち、視線を外した瀬那の顔は絶望に満ちたそれだった。

美人がキレるのはなかなかに怖いらしい。
楽屋での瀬那の態度に驚きと、ある種の恐怖を感じた朝霧は、今自分の斜め前で隼に感謝されている小さな後姿を眺めた。
襟足の長めの赤い髪が、瀬那が首を振るたびにふわふわと揺れて思わず触りたくなる。
そう言えば、ライブ中気分が悪くなり外に出たまま暫く帰って来なかったが、体調は大丈夫だろうか。ふと心配になった朝霧は、更にジッと瀬那の後姿を眺めた。
視線に気付いたのか？那が振り返る。その綺麗な顔に思わず見とれた自分に驚き、顔を歪めてしまう。
「なんだよ」
それを誤魔化すように冷たい言葉が出てしまった。失敗した、と思ったがもう遅く、？那の表情が曇りそうして視線を外されてしまう。何か声を掛けなければと思うけれど、上手い言葉が出て来なくて仕方なく口を噤んだ。
ふっと視線を前に向けると、いちゃつく2人が見える。けれど朝霧の胸は前の様にはざわつく事は無く、微笑ましくも思えて来る。そんな自分の変化に朝霧は驚いていた。
そうして、そんな風に自分を変えてくれたのは、もしかしなくても？那のおかげである事が分かっていた朝霧は、再度？那の後姿を眺めていた。

暗い夜道を朝霧は？那を連れて歩く。１人で帰れる、と言っていた？那を強引に納得させ、駅で遙と隼の２人と別れ学校の寮まで歩いた。
特に会話をする事もなく歩き、あと少しで寮に付くという所でぴたりと？那は足を止める。
不思議に思い振り返ると、綺麗な顔が困惑で歪んでいた。
「どうした？」
朝霧の言葉に視線を泳がす。可笑しい、と思い？那に近づくと、？那は急いで口を開いた。
「あ、の俺、友達の家に泊まるんで・・・」
今まで、そんな事一言も言わなかった。不審に思い更に？那に近づく。
「どういう事だ？」
自分でも驚く程低い声が出た。
「え、と・・・」
しかし、何かを思案するように？那は言葉を濁す。やっぱり可笑しい。どういう事だ？と妙にイラついた朝霧は細い？那の腕を掴んでいた。
「はっきり言え」
威圧的に告げると、？那は諦めたように息を付き口を開いた。
「・・・門限・・・」
小さく告げられた言葉に眉間に皺を寄せ、え？と聞き返す。
？那は大きく息を吸い、一気に言い放った。
「だから、門限１０時なんだよ！」
一瞬何を言っているか解らなかった。門限とは、寮の門限だろうか。？那は親元を離れ、寮にその身を置いている。高校の寮なのだから門限があるのは当たり前で、そんな事に思い至らなかった自分を呪った。ライブなんぞに付き合わせた事も申し訳なく思えてくる。だから、だったのかもしれない。押し黙っている？那の顔を見た。
「俺の家に来い」

そんな事を言っていた。勿論、？那は困惑そうな顔をする。
「門限、破っちまったのは今日俺が誘ったのが原因だろ？責任はちゃんと取る」
そう告げるとその腕を掴んだ。そうして掴んだまま歩き出す。
「ちょっ、だ、大丈夫だよ！！」
ぐいっと力を込め？那は声を上げるけれど朝霧は振り返る事はせずにそのまま歩き続けた。
始めの内は、ぎゃんぎゃんと文句を言い何とか腕を振り払おうをしていた？那だったが、腕力には敵わない事を悟り大人しく引かれるままになる。其の内、引っ張るのも可哀そうかと思い、朝霧は腕から手を離すと替わりに？那の手を握った。
一瞬？那の身体が震えたけれど、やっぱり振り払われる事はなくそのままになる。？那の顔は、今にも火を噴きそうな程真っ赤に染まっていた。

朝霧に手を握られ、顔が何時までも熱い。？那は戸惑いながらもその手を振り払えずにいた。
どの位歩いたか解らなかったけれど、いつの間にか閑静な住宅街に辿り着く。
きょろきょろと視線を這わせながら朝霧の背中に視線を向けると、ある一軒家の前で立ち止まった。
表札を見ると『相良』と書いてある。どうやら辿り着いたようだった。
朝霧はポケットから鍵を取り出すと、静かに玄関を開ける。そうして？那を招き入れた。
玄関のすぐ側にある階段を上り、１つめ目の扉を開ける。どうやら其処が朝霧の部屋らしい。
殺風景な程物が少ない部屋は、随分と閑散として見える。しかし朝霧はそれが落ち着くと言った。

「取りあえず座れば？」
そう促され、？那はローテーブルの前に腰を下ろした。それを見届けた朝霧は一旦部屋から出ると、お盆に載せたカップを持ち戻ってくる。湯気の上ったそれは、香りからも解る様に珈琲のようだ。差し出され大人しく受け取った。朝霧が？那の前に座ると、いよいよ気まずくなる。視線を彷徨わせた？那に朝霧は小さく笑った。
「今日は悪かったな。門限の事もそうだけど」
告げられた言葉にどう答えたら良いのか解らずに、珈琲に口を付ける。
「明日ちゃんと送るから」
何故だか優しい視線を送られ、？那はやっぱり何も言えなかった。珈琲を飲み干しカップを置くと、朝霧は口を開く。
「俺の家に客様の布団なんて無いから、一緒に寝るぞ」
その言葉に？那は固まった。ちらりと視線をベッドに移す。キングサイズではないけれどそれなりに大きいそれは多分セミダブル、というものだろう。一緒に寝る、という事をリアルに頭に思い描いた？那は急いで首を振った。
「俺、床に直に寝るからいい！」
勢い任せて断りを入れた？那に、しかし朝霧は許さない。
「お前に風邪なんかひかれたら、俺がたまらない」
妙に熱の籠った言葉に？那は声を出せずにいた。困惑している？那をそのままに、朝霧はクローゼットを開け、何かを引っ張り出す。それを？那に投げて寄こした。
キャッチしたそれはロングTシャツと短パン。訝しげな視線を送ると、それに着換えろとの事だった。
どうやら寝巻の変わりらしい。反論を許さない朝霧の視線に仕方なく着替えると、朝霧も寝巻変わりのスエットに着替える。朝霧のロングTシャツはやっぱり大きくて、？那が着ると妙にぶかぶかだった。朝霧が小さく笑う。
「やっぱりでかいな」

しみじみとそう言われ、？那はちょっと不貞腐れセミダブルのベッドに素早く入り込んだ。
「お休み」
朝霧の声が聞こえ、ぱちりと電気が消される。そうしてセミダブルのベッドが小さく軋しみ朝霧が入り込むのが解った。
ただ一緒のベッドで寝るだけなのに、？那の心臓は馬鹿みたいに鼓動を早める。その鼓動が朝霧に聞こえないかと冷や冷やしながら？那は目を閉じた。
しーんと静かになった部屋には、時計の秒針の音と規則正しい呼吸音しか聞こえない。
目を閉じた？那だったけれど、緊張が解ける事はなくて眠れそうにない。ゆっくりと目を開けると白い壁が見えた。
どうにも眠れなくて、？那は仕方なく寝返りを打つ。そうしてギクリとした。
眠っているだろうとタカを括っていたが、朝霧の目は開けられており？那を見つめていたのだ。
驚きのあまり声も出ない。どうしたものか思案する？那に、更に衝撃が走った。
徐に伸ばされた朝霧の腕が、？那を掴みグイっと引っ張る。抵抗する暇も無くその男らしい腕に包まれていた。焦って胸を押し返そうとしたが、更にギュッと抱き締められる。
「・・・いやか？」
静かにそう聞かれ、？那は頭を振るしかなかった。一気に体温が上昇する。きっと耳まで赤くなっているはずで、暗闇で良かったとつくづく思ったのだった。

苦しみ

眠れないだろうと思っていた？那だったが、何時の間にか眠りに落ちていてカーテンの隙間から差し込む朝日にその目を開いた。
抱き締められていた腕は、腕枕の様になっていて？那は顔を赤く染める。
そうっと朝霧の顔を見ると、切れ長の目を隠す瞼が小さく揺れた。
起こさない様に身体をずらし、ベッドから這い出る。
「・・・何やってんだよ、俺・・・」
小さく呟き、どうしたものか考えた。
そうして出された答えを実行すべく、借りたTシャツと短パンを脱ぎ着替える。丁寧に寝巻をたたみ、起こさない様に朝霧の部屋を出た。
軋む階段を踏みしめながら玄関に向かい、外に出る。携帯の液晶を確認すると朝の6時だった。
住宅街だからか、車の音はしないけれどジョギングをする青年の靴音と、犬の息遣いが響いている。？那は人に顔を隠すように下を向き、歩き出した。
昨晩、ただ付いて歩いていただけだったが、抜群の記憶力のおかげで帰り道を覚えている。静かな住宅街を抜け、小さな公園を右手に見ながら歩き続けると、見慣れた道へと辿り着いた。この道を左に曲がれば寮が見える。
？那はフッと後に顔を向けた。其処には勿論誰もいないけれど、急に朝霧の寝顔を思い出し1人で赤面する。そうして自分の気持ちを再確認した？那は戸惑う。
「ほんと・・・何やってんだろ、俺・・・」
頭を振り、1人呟いたのだった。

部屋の扉が静かに閉まる音が聞こえた。
朝霧はそーっと目を開け、扉を見る。小さな足音が聞こえ、やがて玄関が開閉される音を確認し身体を起こした。
そうして自分の行動に驚き頭を押さえる。サイドテーブルにきちんと畳まれている衣服を見、小さく息を付いた。
昨晩、何故だか急に？那を愛おしく思い抱き締めてしまった自分に心底驚く。ビクリと肩を震わせながら、しかし静かにそのままで居てくれた？那。小さな寝息を聞いていたら、自然と自分も眠くなってしまい闇に落ちていったのだ。
？那が起きる少し前に、朝霧も目覚めていた。腕の中で寝息を立てている綺麗な、愛らしい顔を何時までも見ていたいと思いそのままで居たのだが、？那の瞼が揺れ、起きる気配を察した朝霧は急いで寝たふりをしたのだった。
朝霧は静かに煙草に火をつける。そうして想いを馳せた。

突然の言葉とキスに、困惑した。
つっぱっているけれど時々見せる幼い表情に笑顔が浮かんだ。
屋上での時間が、いつの間にか楽しい物に変わって行った時、やっぱり時々見せる悲しげな表情にどきりとした。
隼のライブ会場で、他の男に言い寄られている姿を見た時、嫉妬で気が狂うかと思って怖くなった。
そうして昨晩、この腕の中に包み込んだ時、全てを理解した。
あぁ、俺はあの子の事が好きなのだな、と確信した朝霧はその口角を小さく微笑ましたのだった。

寮に帰った？那は、1人思い悩んでいた。
自分の気持ちを自覚してしまえば、もう“身代わり”になどなれない。

あの大きくて暖かい腕を欲しがってしまうから・・・。
1日目は仮病を使って学校を休んだ。しかし、直ぐに里親から様子伺いの電話があって、次の日から休めなくなった。
登校し、何時もなら直ぐに屋上へ向かうけれど、もうあそこには行けない。朝霧に逢ってしまえば、この想いをぶちまけてしまいそうで怖かった。
“身代わり”は自分から言い出した事だったのに、それが？那を苦しめる。まして、朝霧の気持ちは自分にはない事を、嫌という程解っていたから、この恋は始まった時から終わっていたのだ。
そんな事は解っているけれど、はち切れんばかりの想いが？那にのしかかっていた。
珍しく、1限目から出席している？那に、担任はおろかクラスメートまで驚く。しかし、やっと勉強する気になったか、と喜ばれもした。
ただ行く所がなかっただけだけれど、クラスの喧騒が今の？那には丁度良かったのかもしれない。煩く付きまとうクラスメートにウンザリしながらも、屋上へ行かなくて良い口実を見つけ、密かに息を吐いたのだった。

「朝霧！」
ぼーっとしていた朝霧を呼ぶ声がする。振り返ると、其処には遙の姿があった。
もう、彼の姿を見てもこの胸は痛まない。それが？那のおかげなのだと改めて思った朝霧は、しかしここ1週間、その姿を見ていない事に苛立ちを募らせていた。
点けたばかりの煙草を乱暴に消し、遙に向き合う。
そんな朝霧の苛立ちを察しているのだろう遙は、少しばかり表情を曇らせ、しかし無理矢理笑顔をたたえる。そうして朝霧の横に立った。

「どうしたの？又元に戻っちゃったみたいだね」
始め、何を言っているのか解らなかった朝霧は、遙を睨むように見る。
「何が言いたい」
短く告げられた言葉に、以前の遙であれば尻込みしてしまいそれ以上何も言えなかったはずだった。けれど、１年という時間が流れている。
遙は１度大きく深呼吸をし、朝霧に向き合った。
「この１年、朝霧はおかしかったよね？・・・原因は多分僕にあるんだろうけど。でもここ数カ月は、あの事がある前の朝霧に戻ったみたいだったよ。・・・僕が言っている意味、解る？」
言葉を選びながら、だったけれど今の朝霧には充分良く解った。だから遙から視線を外す。
「以前は、僕が一杯朝霧に甘えてたよね。何かあると直ぐに朝霧を頼った。・・・僕も少しは大人になったんだよ？」
遙が言おうとしている事は、なんとなくわかった。けれど、やっぱり苛立ちだけが募ってしまう。
「回りくどい事言ってないで、はっきり言ったらどうだ？！」
おもわず遙の胸倉を掴み上げていた。視線を遙に向けると、真っ直ぐに朝霧を見詰める真摯な視線が迎え撃つ。
朝霧の負けだった。掴み上げていた胸倉をゆっくりと離し、そうして座り込んでしまう。
遙は襟元を直した後、静かに朝霧の横に腰を下ろした。
「・・・俺、好きな奴が出来た・・・」
小さな朝霧の声に耳を傾ける。
「うん。それで？」
まるで子守唄の様な優しい声音に、朝霧は観念したように？那との出会いから、自分の臆病なまでの想いを話したのだった。
最後まで言葉を挟む事なく聞いてくれた遙は小さく息を吐く。そうして複雑なまで揺れ動く朝霧の目を捉えた。

「朝霧、ちゃんと言葉にして伝えないと駄目だよ。・・・僕は今でも朝霧を1番の親友だと思ってるよ？だから朝霧には辛い思いはして欲しくない」
まっすぐな眼差しで、こちらが赤面するような事を言う。
ついつい照れ臭くなり視線を外そうとした時、遙は朝霧の腕を軽く叩いた。
視線を外すな、という事らしい。
朝霧は観念し、視線をその綺麗な、輝かしいまでの遙の顔を見詰め返した。
「ちゃんと言葉にして、そうして幸せになってよ」
息を飲む程の、びっくりする程綺麗な笑顔の遙はそんな事を言い、朝霧を残し屋上を後にした。
遙に背中を強く押された気がする。しかし、一歩が踏み出せない。
そうして、何時の間にか陽が傾き出した空を眺めた。
自分が吹き出した紫煙が、赤紫に染まる空に消えて行く。
1年前に憶えた煙草の味が、妙に舌を刺激し眉間に皺を寄せる。
遙の事が死ぬ程好きだったはずなのに、今自分の胸を占めるのは瀬那だ。
何時の間にか横に居るのが当たり前になっていたから、想いを伝える事を躊躇った。
そんな臆病な自分に嫌気がさして、そして1年前の、同じ過ちを繰り返すのか？と自問自答する。
遙に、・・・親友に背中を押されたのだ。
何を躊躇う事がある？
気持ちを伝えて、ダメなら仕方ないではないか。
又、1人になるだけだ。
でも多分1年前のように腐ったりはしないはずだ。だって俺には、こんな俺の事を今でも“親友”と言ってくれる、元想い人が居るではないか・・・。
朝霧は吸っていて煙草を揉み消し、何かを決意するように1度空を

睨みつけるように眺め、そうして屋上を後にしたのだった――――。

想いの丈を・・・

俺ってこんなに臆病だったか？
そんな事を思いながら、瀬那は授業に参加していた。
ふと窓からグランドを眺めると、其処には見たくもない人物の姿が見える。
瀬那が欲しても手に入れる事の出来ない想いを、１年もの間独り占めしている綺麗な人・・・。
自分の思考が卑しい物になっている事に気が付いて、瀬那は急いで視線を外した。
別に遙が悪い訳ではないのだ。
自分の今の気持ちと其れは多分別問題で、浅ましい嫉妬など御門違いである事は百も承知している。
いるけれど、やっぱり気持ちの整理なんか出来なくて、怖い顔で遙を見てしまっていた。
想いに耽っていた瀬那の耳に、終業を知らせるチャイムが聞こえる。
これから昼休みだ。
開きもしなかったノートと教科書を机の中に押し込み席を立った。
教室に居る事に少しだけ慣れたけれど、いかんせんつるむのは大嫌いで、かまって来るクラスメートを煩わしく思う。だから、いつも急いで教室から抜け出していた。
最近の瀬那の居場所は、学校内の図書室。
殆ど人が来ないし、居る人間は他人に興味が無い、といった感じで自分の世界に浸っている。瀬那には好都合だった。不都合だったのは煙草が吸えない事。
屋上へ行きたい気持ちはあったけれど、朝霧に鉢合わせでもしたらたまった物ではない。

だから静かにこの図書室の一番奥。本棚で視界が阻まれる場所を居場所に選んだ。
最奥の場所に椅子など無いから、床に直接座り込む。
窓から流れてくる気持ち良い風が、留めきれてなかった淡い色のカーテンを、レース部分と共にはためかせていた。
その気持ち良いまでの空間に瀬那は思わずうっとりとしてしまう。
少しだけ、と思い目を閉じた時、思いがけない衝撃が瀬那を襲った。
「やっと見つけた」
低い声が聞こえる。一瞬空耳？と自分を疑ってしまう程、それは思いがけない事だった。
スローモーションのように視線を上げて行くと、今1番逢いたくない、でも1番恋しい人の姿があった。ただ呆然とその姿を眺める事しか出来ない。
「めし」
一言言うと、その手が瀬那に差し出された。意味が解らなくて目をぱちぱちさせる。
そんな瀬那の反応に、何故だか少しイラついた様に舌打ちをした朝霧は、徐に瀬那の腕を掴み立ち上がらせた。そのまま歩き出す。
驚きに言葉もない瀬那は、だけれどこのままでは要らぬ事まで言ってしまいそうで、抵抗を試みた。
廊下に出た所で、引っ張られる腕を引き戻す。腕を離しはしなかったものの、歩みを止めてくれた。安堵から一つ息を吐く。
そんな瀬那を朝霧の意思の強い瞳が捉えていた。その視線に気付いた瀬那は、視線を足元に降ろす。きっと見詰め合ってしまったら、もうこの想いを押し留めておく事はできないから――――。
「突然なんですか？俺今忙しいんですけど・・・」
視線を上げる事なく口早に告げる。しかし、朝霧は表情を変える事なく言った。
「いいから付き合え」
言い放ち再び腕を強く掴むと歩き出してしまった。

どきどきが止まらない。
心臓が口から飛び出してしまうのではないか、と心配してしまう程だ。
連れてこられたのは、何時もの屋上。瀬那は朝霧の横に座らされ、その手に朝霧が買ってきてくれたのだろう、サンドウィッチが握らされていた。
瀬那の横には当然のように朝霧が座っていて、やっぱり買って来たのであろうおにぎりを頬張っている。
ちらりと視線を向けると、端正な横顔が大きな口を開け、最後の塊を口に放り込む所だった。色気のある口元が、放り込まれたおにぎりを咀嚼する。男らしい喉元が、咀嚼した食べ物を飲み込むのが解った。
その一連の動きが、妙に色気を発していて、瀬那は思わず赤面してしまう。
「食わないの？」
突然の言葉に驚く。何時の間にか朝霧の視線が瀬那を捉えていた。
正直、食欲は無い。しかし、折角用意してくれた物を拒否するのも失礼かと思い、仕方なくサンドウィッチの包装を破いた。
「・・・頂きます」
釈然としないけれど、一応感謝の意を込めつつ告げると、朝霧の怖いまでの顔が綻んだ。
その笑顔に持っていたサンドウィッチを取り落としそうになる。今までにない優しい笑顔に、瀬那はもう死ぬとまで思ってしまった。
急いで視線を外し、ハムとレタスが挟まれているサンドウィッチに口を付けた。シャリシャリとレタスを咀嚼する音が響く。何故だかそれだけで、緊張が解れて行く気がした。
しかし、そんな事を思ったのも束の間、朝霧はとんでもない事を言う。瀬那は思わず口に入れていた食べ物を吹き出す所だった。

「なんで屋上に来ない」
不意に核心をつかれる。視線は先程のような優しい物ではなくて、苦しそうな物だった。
「俺は毎日ここで壱尹を待ってた。でもお前は来ないし、まさか1年の教室に行くわけにもいかないから・・・」
待っていた、と朝霧は言った。瀬那は自分の耳を疑う。きっと聞き間違いだ、と自分に言い聞かせ、口腔内に残っていた食べ物を飲み込んだ。そうして、言わなければならない事を早く終わらせたくて瀬那は口を開いた。
「俺が言いだした事ですけど、“身代わり”の件・・・あれ、終わりにしたいんです」
ずっと考えていた。
初めは朝霧の悲しい顔が可哀そうで、始めた事。
何度も屋上で過ごした時間があまりにも楽しくて、自分の気持ちに少しずつ変化が生まれた。
遙の事を見詰めるあの優しい眼差しが、自分に向く事は無いと悟った。
そして、あの腕に抱きしめられた時、自分の気持ちに気付いてしまったのだった。
その時から、自分が始めた“身代わり”はもう無理である事を悟ってしまう。
そして、なるべく早い段階で、自分の胸に刻まれた傷が浅い内に、手を引くべきだと思ったのだ。しかし、臆病な自分は、朝霧に逢う事はおろか、伝える事すらできないでいた。
だけれど今日こうやって強引に屋上に連れてこられて、その時が来たのだと思ったのだ。
「・・・なんで？」
地を這うような低い声が聞こえる。恐る恐る朝霧の顔を見ると、息を飲む程格好良い顔が能面のように表情を失っていた。
「なんでって・・・？！」

言葉を発した時、影が陰り能面のような顔が目の前に有った。次の瞬間、衝撃が走る。
胸倉を掴まれたかと思ったら、？那の唇に何かが宛がわれた。驚く程の近さに、朝霧の閉じられた瞼が見える。まるでスローモーションのようにゆっくりと唇が離れて行き、其れに伴い朝霧の顔がはっきり見えるようになった。
掴まれていた胸倉が放される。
？那は何がおきたのか理解できずに、瞬きすら忘れただ正面を見つめていた。

「俺が言いだした事ですけど、“身代わり”の件・・・あれ、終わりにしたいんです」
？那の言葉が木霊する。
やっと捕まえて、なんとか屋上まで連れて来たのはそんな言葉を聞きたいからではなかった。表情を無くしながら朝霧は、ただ横にいて欲しいだけなのにやっぱり俺の想いは伝わらないのか？と自問自答する。しかし、想いを伝えていないのだから伝わるわけがない。
親友に、遙に背中を押してもらったではないか。
伝えなければ何も始まらない。
其処に思い至った時、朝霧は行動を起こしていた。
自分を見ない？那の胸倉を掴み、自分の方を向かせる。そうして、その艶めかしい程赤い唇に自分の物を押し当てた。
言葉も無く、赤い瞳を見開く？那を尻目に、その唇を堪能しそうして放してやる。掴んでいた胸倉も放してやると、？那は人形のようにそのままの形でフリーズし、ただ正面を向いていた。
朝霧は失敗したかも、と思う。
想いを伝える前に、行動をおこしてしまったのだ。
？那が驚き、何も言えなくなるのは解っていたはずなのに・・・と後悔する。

けれど、艶めかしい程の唇が思った以上にしっとりとしていて、もう1度堪能したいと思ってしまった。
「？那・・・？」
けれど、反応してくれないのでは困る、と思い、初めて名前を呼んでみる。
まるでロボットのような動きで？那はゆっくりと振り向き、見開きっぱなしのその瞳に朝霧を映した。その顔が驚く程不自然に笑顔を作る。
「え、なに？」
だからもう1度、今度は首の後を掴み口付けた。？那の身体が大きく揺れる。そうして思った以上に強い衝撃で、押し返された。赤い唇をもっともっと堪能したかったけれど、しかたなく放してやると、大きな赤い瞳には涙が浮かんでいる。
「な、な、なにすんだよ！！」
顔を真っ赤にしながら？那は叫んだ。
「キスしただけだろ？」
そう言ってみると、赤い唇をわなわなさせて黙ってしまう。その反応があまりにも可愛すぎて、あぁ、やっぱり俺はこの子が好きなのだと、朝霧は思った。
「・・・？那が先にしたんだろ？」
もう1度名前を呼んでみる。いつかの屋上でのキスを揶揄しながら告げると、？那は今度こそその瞳から大粒の雫を零した。
「な、何言ってんだかわか」
「好きだ、？那」
？那の言葉を掻き消すように告げ、もう1度唇を奪う。
ポロポロと零れ落ちる涙を指で拾い上げながら、抱き締めてみると、今度は押し返される事はなかった。
腕の中で小さな体が震える。涙交じりの声が耳に届いた。
「・・・あんた、勘違いしてる。俺が“身代わり”だったから遙さんへの気持ちと混同してるんだ」

それはある意味当たっているように思うけれど、この胸から溢れんばかりの想いはきっと勘違いではないはずだ。今目の前で、遙と？那が危険なめに遭っているとしたら、間違いなく？那の事を助けるだろう。“身代わり”がいつの間にかそれよりも上になったのだ。
「勘違いなはずないだろ。俺の気持ちは俺にしか解らない」
伝わって欲しいと思いながら、朝霧は強い程の想いを小さな体にぶつけた。

真っ赤な顔を朝霧の腕の中に隠しながら、？那は零れる涙を止める事が出来なかった。
これは夢だ、と思いながら、しかし欲しかった温もりを与えられ、拒む事ができない。
なんとか伝えた拒絶の言葉も、強い口調で退けられてしまった。
朝霧は間違いなく“好きだ”と言った。そうして3度もキスされた。
？那の頭の中はグチャグチャになってしまい、ギュッと握っていた拳を開いて、朝霧の大きな背中に恐る恐るその手を伸ばす。身体全体で朝霧の温もりを感じ、小さな溜息を吐いた。
「あんた・・・卑怯だ・・・」
本当にいいのだろうか。
この温もりを貰っても・・・。
耳元でフッと小さな笑い声が聞こえる。それが朝霧のものだと理解すると、やっぱり騙されたのだと思った。だから、突き飛ばそうと思ったのに、小さなアクションで察したのか朝霧は抱き締める腕の力を強めた。
「お願いだ」
苦しそうな声に動きを止める。
「逃げないでくれ・・・」
続いた言葉に、もう頭は沸騰寸前だった。
もういいや・・・。

騙されていたとしても、もうどうでも良い。
自分が好きになってしまったのだから、それで良いではないか。
好きな人が、こうして自分の事を必要としてくれている。
今は、それだけで充分ではないか・・・。
?那はそう思い、再度その大きな背中に腕を回した。
「逃げねぇ～よ。・・・俺が始めた事だ。最後まであんたに付き合ってやるよ・・・」
少しだけ、自分に逃げ道を作り?那は決意ともとれる言葉を伝える。
朝霧の小さな吐息が、聞こえた気がした。

何時もの屋上で2人は背中を合わせ座っている。
通り過ぎる風に、?那の赤い髪が巻き上げられた。
パタパタとネクタイがはためき、幸せな一時に瀬那は小さく笑う。
瀬那の背後で、単行本を読んでいた朝霧は顔を上げた。
「瀬那?」
名前を呼ばれるのには相変わらず慣れない。顔を見られていない事を良い事に、瀬那は大いに赤面した。
「何かあったのか?」
再度声を掛けられ、瀬那は言葉を捜す。
ふと視線を這わせると、グラウンドに遙と隼の姿を認めた。2人は仲良さそうに笑顔を湛え、グラウンドのベンチに腰を降ろしている。
多分昼食を摂るのだろう。
試すような事をしてはいけない、と思うけれど、やっぱり自分の事を好き（・・）と言う朝霧の言葉が嘘のようで、瀬那は言葉を紡いだ。
「遙さんと隼さん」
そう言い、朝霧の顔を確かめた。

瀬那越しに遙と隼の姿を確認する。
相変わらず自分をいまいち信じてくれていない、愛しいビスクドールをちらりと見た。
これは多分試されているのだろうな、と漠然と思いながら朝霧は言葉を紡ぐ。
「あぁ、相変わらず仲良いな」
ジッと、自分の顔色を見詰める瀬那に頬が緩む。
この頑固な恋人は、次に続く言葉を聞いたらどんな顔をするのだろう。
そんな事を思いながら、朝霧は言葉を続けた。
「俺も、あれ位瀬那と仲良くしたいんだけど？」
とたんに瀬那の顔が赤く染まった。
この人は本当に卑怯だ。きっと、自分の気持ちは嫌というほど伝わってしまっている筈で、敗北感を感じる。
視線を外し、精一杯虚勢を張った。
「・・・ばかじゃね～の？」
瀬那の言葉に、朝霧は満足する。
まだ自分たちは始まったばかり。
焦る事はない。
時間はまだあるのだ。
ゆっくりとその時間を使い、このビスクドールに自分の想いを刷り込んで行こうと心に誓い、朝霧は瀬那の赤い唇に己の其れを落としたのだった――――――。

想いの丈を・・・（後書き）

この作品は、“友達から始める恋”でのヒール役だった朝霧の物語でした。

最後まで読んでくださった方、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5726m/

身代わりから始める恋

2010年10月9日07時30分発行